



宮本百合子、葉山嘉樹、黒島伝治、川端康成、小林多喜二、徳永直の小説選集が刊行された。その外、夏目漱石、森鷗外、谷崎潤一郎、永井荷風、佐藤春夫、有島武郎、島崎藤村、石川達三、井上靖、松本清張、水上勉、山崎豊子、三浦綾子、司馬遼太郎、有吉佐和子、三島由紀夫らの作品が出版された。

日本の歴史と中日関係史について、古代の徐福東渡に関する研究がさかになり、肯定と否定を廻って論争が行われている。近代については、明治維新の性格について、ブルジョア革命、絶対王政、ブルジョア民族民主運動としてのブルジョア革命など諸説がある。明治維新の時期区分についても、その始点をペリー来航の1853年とすることには合意しているが、その終わりについて、いくつかの説があり、論議されている。例えば、1853-1869年を幕末・維新・内戦と再建の時期とするか、1853-1911年をブルジョア革命の時期とするか、或いは、それぞれ憲法発布政権の1889年、国会開設の1890年、日清戦争の1894年を終わりとするなどの諸説である。王芸生編『60年来中国と日本』は、1870年代-1930年代の中日関係の主な史料を集めて、1930年代に初版、1970年代には改訂再版がでた。1980年代後半には、中国人学者の執筆陣による『東アジアのなかの日本史』全13巻（日本語版）で古代から現代までの日本史と中日関係史を知ることができるようになった。

日本経済について、その高度成長を注目し、中小企業の管理経験、マクロコントロール、科学技術の発展、技術立国、貿易立国、財政、金融、対外投資、冷戦後日本経済の行方、アジアにおけるその地位と経済協力など諸問題を研究した。『戦後日本双書』全10冊の中で、8冊の内容は経済で、産業政策、インフラストラクチャー、財政、対外貿易、独占資本、経済社会統計など諸内容に触れた。今の研究は今後発展の見通しに関心を持ち、その産業構造の変化、経済構造の調整、科学技術及び対外経済関係の展望なども視野に入る。

日本の政治、法律について、戦後の体制改革に注目し、それとともに、憲法と国会、経済立法、教育立法、政党の政策制定と、派閥公務員制度と行政改革も触れた。日本の外交と総合安全保障戦略の研究は、明治維新後、富国強兵を重点にし、拡張的な軍事侵略をしたが、戦後復興中においては、経済優先戦略の下で、貿易立国、経済大国を目標とし、その後、さらに政治大国と国際国家を目指し、経済力を後盾とし、外交と防衛力を強め、米国の同盟国と西側の一員として活躍し、重点をアジア・太平洋地域において、全世界に役立てることを期待すると指摘していた。

紙面の関係で、日本哲学・宗教などの研究に関する内容は省略するが、中国日本研究の全体像について、北京日本学研究中心より刊行された『中国日本学年鑑』が詳しい。

(本文は若干の訂正を除き原文のまま掲載しました。)

## 現代日本資料センター 成長を続けるインターネットにおける日本の 学術情報

マクヴェイ山田久仁子

インターネットにおける日本初の学術的データベースの数が増えている。その中には、個人の愛情のたまものであるサイトもあれば、潤沢な資金援助を受けた公的色彩の強いものもある。いずれにしろ、それらの内容を調べてみる価値はある。

文部省の学術情報センター(NACSIS)は、昨年度中に2,323のデータベースが、文部省の資金援助によって作られたと報告している。NACSISのウェブサイト(<http://www.nacsis.ac.jp.ir.dbdr/dbdr-lz.html>)はそれらデータベースの全リストを掲載し、あわせて375のサイトにリンクをはっている。リストは評価選抜されたものではなく、網羅的なものになっている。

一方、個人が、自前のウェブサイト Academic Resource Guide (<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/index.html>)、The Underground Theatre (<http://www.hongo.ecc.u-tokyo.ac.jp/~ee77030/index-j.html>) 等で学術情報用リンク集を提供しているが、選ばれたサイトには評注が付き、選抜も厳しい目でなされている。文部省支援のものと、個人制作のもの両方をカバーしているが、後者の方に質の高さで際立っているサイトが多く見られる。

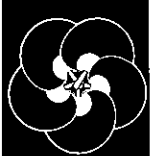
一般に、公的サイトは、登録を済ませた利用者へのみ、時期の明示されない「試行期間」に限り無料公開されていることが多い。以下に注目のサイトを幾つかあげてみる。

1. 「日本文学等テキストファイル」(<http://kuzan.fukui-u.ac.jp/bungaku.htm>) は、「古事記」から横光利一まで、日本文学テキストにアクセスできる約150のサイトに短評を付けてリンクしている。制作は岡島昭浩氏。氏と利用者との通信が記録公開されている「会議室」で、最新のサイト情報が得られる。

2. 国文学研究資料館(<http://www.nijl.ac.jp/>)のサイトでは、登録済みの利用者にテルネットで和古書目録、マイクロ資料目録、国文学論文目録を提供している。また、古今和歌集をはじめとする「二十一代集」の全文データベースは(<http://www.nijl.ac.jp/21daisy/21daisy.html>)に隠れている。

3. 東京大学資料編纂所(<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/>)は、所蔵資料目録はもちろん編纂所所蔵の古文書、諸家文書、維新史料などの全文データベースを構築、公開している。現在も継続中の壮大なプロジェクトで、その成果は将来日本史研究者にとって不可欠な一次資料サイトとなるだろう。

4. アジア経済研究所(<http://www.ide.go.jp/>)は、アジア関係資料を中心に所蔵する研究所図書館の図書及び論文検索データベースを公開している。アジア21諸国の1990年



代初めからの基本統計は、便利だ。

5. 「経済学文献データ検索」(<http://rio.andrew.ac.jp/econ/bunken.html>) は、松尾純氏によるもので50,000件のレコードが非常に効率良く検索できる。また、大阪市立大学の経済学文献目録 (<http://sm1.eri.osaka-cu.ac.jp/>) は、1994年8月以降に発行された日本の雑誌約1,500誌に掲載された経済学関係の論文を主題ごとに分類している目録だ。

6. 「財政学データバンク」(<http://www.iss.u-tokyo.ac.jp/~tdoi/pfdata.html>) は土居丈朗氏の提供で、財政に関わる都道府県ごとの様々な数値データがLotus 123及びMS-Excelで読めるかたちになっている。バンクは今後も成長を続けるもよう。また、財政に関連するディスカッションペーパーの全文入手できるサイトにリンクされている。

7. 「ソキウス・プロ」(<http://www.honya.co.jp/contents/knomura/links/link.html#09>) で、野村一夫氏は日本の社会学者および関連する分野の研究者によるウェブサイトの中から選んだものにリンクを張り、注釈を付している。

8. 「日本社会学文献情報データベース」(<http://sociodb.rikkyo.ac.jp/default.htm>) は、日本社会学会が中心になって作られている、日本の社会学関連の文献(著書、訳書、論文等)の書誌情報データベース。1991年以降の12,000件が収められている。

9. 東京大学社会科学研究所(<http://www.iss.u-tokyo.ac.jp/>) は「社会科学データベース」、「調査データ・データベース」、「研究情報データベース」を構築中で、すでに幾つかのデータベースを公開しているとともに、日本の社会学者に手持ちのデータを研究のためのデータベース構築に提供しようよびかけている。これは、新しい試みだ。利用者は、正式な利用願を提出しなければならない。

10. 法政大学大原社会問題研究

所のサイト(<http://oohara.mt.tama-hosei.ac.jp/>)は大変良くできた「社会・労働関係論文データベース」と豊富な労働関係情報でよく知られているが、最近加えられた「データ・ファイル：戦後50年の労働問題」には、「年齢別女性労働力人口の推移」などの有益なデータが入っている。

11. 国際日本文化研究センター(<http://www.nichibun.ac.jp/dbsel.html>) は日本文化に関する写真や挿絵、江戸末期から明治初期の古写真、海外にある日本美術の画像データベースと、センター所蔵の1900年以前発行の日本に関する欧米図書の本誌と画像情報のデータベースを、利用登録者に試行期間中無料で公開している。

## ハーバード・イェンチン図書館のたより

ジェームスK.M.チャンと青木利行  
ハーバード燕京(イェンチン)図書館

ハーバード燕京(イェンチン)図書館は、1928年に、ハーバード大学ハーバード燕京研究所漢和図書館として創立された。母体であった研究所は、設立に関係のあった二つの大学、ハーバードと中国の前燕京大学(現北京大学)の名にちなんでハーバード燕京研究所と名付けられ、アジアの高等教育、特にその地域の歴史と文化の研究の促進を主目的とする独立した財団として出発した。ハーバード大学では、絶えず専門家の意見を聞くことができ、東アジアの学者が社会人文科学の広い分野で他国の学者との接触と意見交換を通じて自分の能力を伸ばすことができる。そのハーバード大学に、東アジア研究プログラムの発展を促進するため、図書館をつくったのである。この図書館は、ハーバードカレッジ図書館が1879年以来集めてきた何千冊に昇る中国と日本の図書を母体としてその後急速に発展し、アジア以外の地域にある学術図書館の中では東アジア研究のための最大

の図書館となった。1965年に現在の名称がつけられ、1976年までハーバード燕京研究所の附属機関であったが、その年にハーバードカレッジ図書館に移管された。

ハーバードの日本語コレクションの起源は1914年まで遡ることができる。1914年に東京帝国大学から仏教学研究者の姉崎正治(1878-1949)と中国学研究者の服部宇之吉(1867-1939)が講義をするためにハーバードに来た時、日本の仏教と中国関係の貴重な研究書をハーバードカレッジ図書館に寄贈したのである。しかし、その後の日本語コレクションの安定した成長を促すための日本人の図書専門家は、1959年に初めて任命されたのであった。それ以来、日本語コレクションは、以下のものも含めて多岐にわたる分野でその規模を拡大してきた。

図書館は1948年に6,500冊からなるペツォルト仏教文庫を購入した。ブルノ・ペツォルト博士はオーストリアの学者で、長い間日本に滞在して仏教の僧侶となり、大乘仏教を研究して、それを実践したが、特に天台宗の教義を研究した。氏の文庫には、13-14世紀の約200冊の稿本だけでなく、徳川時代(1600-1868)に印刷された絵図や、多くの貴重な研究書が含まれている。

日本語コレクションには、古典および現代日本文学書のシリーズがよく揃っている。現代日本の小説の蔵書は特に豊かで、重要な小説家を網羅している。

寺院や大名、さらに個人の文庫に入っている稿本の複製本も含めて、日本の史書もよく揃っている。県史も豊富にあり、米国内では最良のコレクションの一つとなっている。図書館の日本語マイクロフィルムコレクションの中には、1991年に日興証券がハーバードに寄贈した米国内で唯一の明治マイクロフィルムコレクションが入っている。このコレクションは15,000リールから成り、明治時代(1868-1912)に日本で出版された本の約70%を収めている。この明